

## 荒尾高校理数科



荒尾高校理数科2年生。同じ目標に向かって突き進んだ9人は普段から仲良しです。写真は干潟にちなみ、カニのポーズ

昨年、県公立高等学校理数科研究発表会が行われ、「荒尾干潟の底生生物（ベントス）―住み分け、共存、共生―」というテーマで荒尾高校理数科の2年生が出演し、最優秀賞に輝きました。

南関高校との再編・統合により、昨年4月から同校に岱志高校が開校。新校には理数科が設けられないため、生徒たちは同校最後の理数科生となり、今年度の発表で最後の参加となりました。

「前年度、先輩たちが優秀賞を獲ったとき、何としても自分たちの代で先輩を超え、有終の美を飾りたいと思ったんです」と学級委員を務める福嶋さんと橋本さんは話します。

1年生の頃から、時には休日返上で、干潟に向き合ってきた生徒たち。荒尾ならではの地域に密着した研究をしようと、トビハゼ・アナジャコ・アサリの生態研究を通じて、干潟の生態系の多様性に迫りました。「初めは全員が干潟のことを何も知らない初心者でしたが、でも、研究を進めれば進める

ほど、アナジャコが1.2mの砂泥中まで酸素の豊富な海水を供給していることなど、気付きと驚きの連続で、干潟の魅力に引き込まれていきました」。

干潟で泥だらけになりながら、生物を捕まえたり、200個以上のアサリを測定したり、地道な作業を重ねる日々。トビハゼをうまく飼育できず、死なせてしまうなど、研究がうまく進まない日もありました。けれど、知恵を出し合い、辛いこともみんなで見つめ合いい、乗り越えてきました。

「研究は一人ではできません。仲間同士での助け合いはもちろん、干潟での研究を応援してくれた荒尾漁協など、多くの人たちに支えてもらいました」と全員で声を揃えます。

「近年、有明海ではタイラギの漁獲量が減るなど、干潟の生態系が変わりつつあります。私たちの研究成果を通して、90種類以上の多くの底生生物が暮らせる干潟の素晴らしさをたくさんの人に知ってもらい、干潟を未来に残す一助になれば、うれしいです」。



1\_アサリが食べるプランクトンを観察 2\_型取りしたアナジャコ巣穴の掘り出し 3\_飼育したトビハゼ巣穴の構造確認